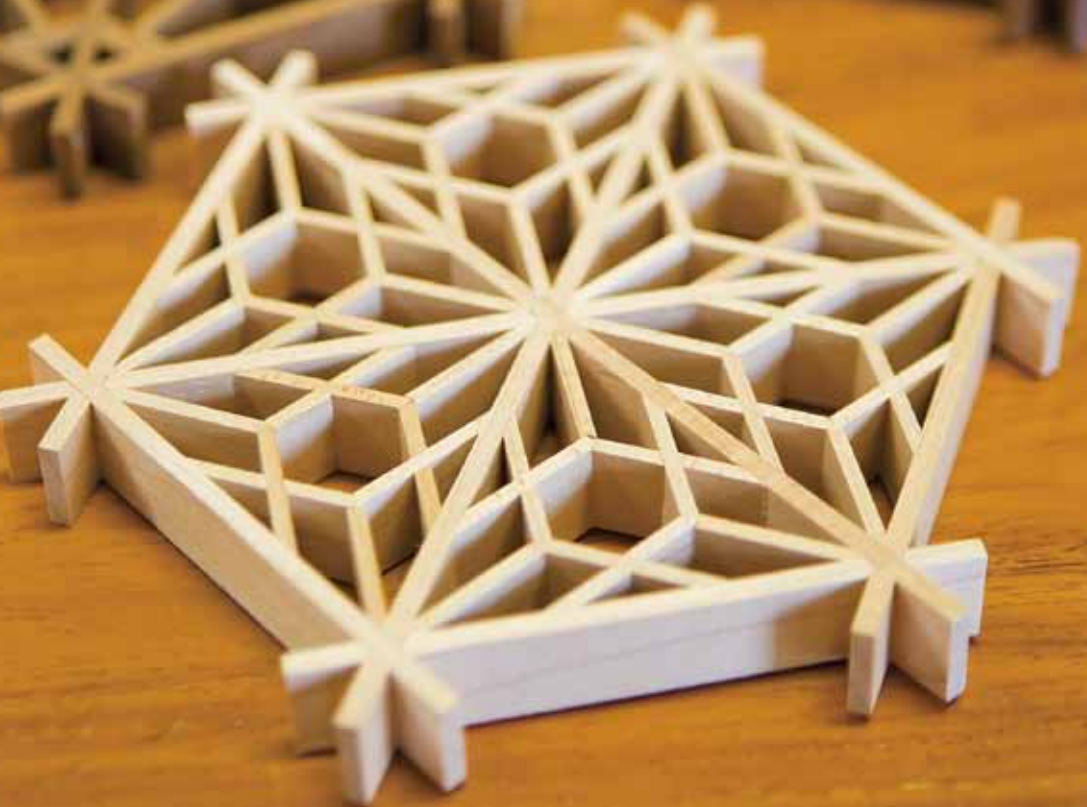


匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



至高の陶醉



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

220余年の伝統の技が贅をつくした「燿」きらめき。

讃岐の金毘羅酒として親しまれ、きまじした燿が、酒づくりの贅をつつておくりだした「燿」燿酒。燿酒の歴史は今をさかのぼること三〇余年の寛政元年。当主八代目であった西野嘉右衛門が、金毘羅さんの舞ではじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、その丹精こめた手づくりの味は、金毘羅詣の人々から最も親しまれ、きまじした。燿酒「燿」のえも言われぬ風味と「燿」には、金毘羅の心意気と酒づくりの神髄が相まじり、ついでています。

真珠玉のまじりこめ

水品のまじりこめ研ぎすました酒造好適米(山田錦)

燿酒「燿」に使っているのは、酒造好適米の中から選びぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりやや大きい、玄米のわずかなる割合での、まるで真珠玉のような芯だけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返くり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。

昔から「麴、二配三造り」といわれ、りとおりの複雑多岐にわたる工程を熟達杜氏がつとめてきた。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるよに精魂をこめ、技の限りをこめて、低温でじっくりつくりあげる。こうして、燿酒のアルコール分、旨味を米から造り出した、手づくりの微妙精緻な燿を誕生させたのです。

芳醇な口、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに燿酒の芸術品。この稀なる燿酒を、日本酒をこたく愛するみなさまにじっくりと味わいつけていただきたい。

燿 金 陵
超特撰

ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた貴方さまだけの番号です。

税込 標準価格 10,800円 1.8L
5,400円 720ml
西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町四六三 電話)〇八七七三三 四三三三
未発着の燿酒は保証書と入れ、紙箱中や授賞期の燿酒は気をつけてください。

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



涸林

SAKABAYASHI

随筆特集

裏方さんの東京オリンピックク——一九六四年

運動会今昔

八重の歌 その二

ほろ酔い詩歌紀行 —— 草野心平

絵と文 鐵砲百合

シェパードが前立腺ガンを診断

小さな展覧会

ミシガンの「赤杉小学校」

人縁、仏縁

池井 優 …… 4

高橋 和 島 …… 6

安森 敏 隆 …… 8

日高 昭 二 …… 10

中西 美 子 …… 13

杉本 忠 夫 …… 14

内野 潤 子 …… 16

宮地 智 子 …… 18

志村 有 弘 …… 20



絵と文 六十九年目の夏 佐川毅彦 22

主題 志村栄守 23

僕はいったい何者なのか 片岡義男 25

「五十歩百歩」考 山西靖彦 27

絵と文 ライプチヒに残る和紙とゴシック祭り さかもと ふさ 29

銀座のすずめ 永岡慶之助 30

妙みょう 山本千明 32

たっぷりの時間が与えられ、思うこと、気づくこと 宮本富夫 34

渋谷・金王八幡宮の男 池田一貴 37

表紙・グラビア…組手細工

裏方さんの東京オリンピック——一九六四年



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

オリンピックで一番注目を浴びるのは、活躍した選手だ。さらにメダリストを育てたコーチ、チームを勝利に導いた監督である。次にオリンピックを成功に導いた組織の関係者である。しかし開催に当り、目に見えないところで努力した裏方の存在なくしてオリンピックの成功はない。一九六四年の東京大会で努力した裏方を紹介しよう。

選手村の料理人——村上信夫

オリンピックに参加する選手にとって重要なのは食事だ。肉体を極限まで駆使するアスリートにとってなにごと食べて体力を維持し、試合にベストの状態で臨むために食事は最大の関心事である。国により、地域により、ま

た宗教上の制約など世界中からやってくる選手の胃袋に合う料理をどう提供するか、一九六四年の東京オリンピック開催に当ってその重責を担ったのが、帝国ホテルの料理長であった村上信夫であった。村上は選手村食堂の調査のため六〇年のローマ大会に派遣され、食堂関係者を日本製コンパクトカメラで「買取」し、設計図、調理、サービスの動きなど８ミリに収めて帰国した。問題は中近東やアフリカの選手が好むエスニック料理であった。手分けして各国の大使館を訪ね、大使館の料理人、大使や館員の夫人に代表的な料理を作ってもらい試食してレシピを完成させた。こうして一〇〇以上のレシピを集めた。もうひとつの課題は冷凍食品を使うことであった。選手村

では毎食一万人分の料理を出さなければならぬ。選手のカロリーは一般人の二倍だから二万人分に相当する。生鮮材料を使うとマーケット価格に影響し、値があがる。村上はオリンピックが始まる半年も前から肉、魚、野菜を少しずつ購入し、冷凍していった。問題は帝国ホテルの犬丸社長が冷凍食品を認めないことであった。村上は材料の冷凍と解凍の仕方を工夫し、いつも材料と同じ味を出すことに成功した。各国担当者の日本への誤解を解くことも必要だった。フランスやイタリヤは料理人を同伴してきたが、彼らは日本の野菜が人糞の肥料で作られていると思ひ込んでいたのだ。誤解を解くため化学肥料を使用して極めて衛生的に管理されている野菜栽培の現場を見せ

た。全国から料理人がオリンピックの選手村に集められたが、当時コックは男子が進んでなる職業ではなかった。さらに彼らは一匹狼的人物が多く、彼らをまとめるのも村上の大きな役目であった。特にサンドイッチなど一人で作るのが当然と考えられていた時代に、パンは機械で切る、バターを塗る、ハムを挟む：など役割分担を決め、調理システムの方法を教えた。各料理人は地方に“村上方式”を持ち帰り、全国にそのやり方を普及させたのも東京オリンピックの遺産となった。

選手村の女性理容師―山方澄枝

オリンピックのための選手村は開催の約一カ月前にオープンする。入村する選手と役員に備え整備に入るためである。オリンピック終了まで長期に渡るため理容室が必要になってくる。三〇台の椅子を並べた理容室をオープンすることになり、東京理容師組合に大会本部から理容師派遣の要請がきた。経験五年以上、国家的事業への協力とあつて手当はごくわずか、奉仕同

然である。床屋さんが流行っている時代とあつて腕のいい理容師はいきたがらず、ほとんど希望者はいなかった。困った理容組合は各支部から均等に人を出すことにした。山方澄枝が「経験三年だがなんとかなるよ」と中野支部長であつた父のすすめで引き受けたのは、実家の手伝いと食事の世話の明け暮れていた生活とは違つた経験をしてみたいとの気持ちからだつた。当初は一〇人でスタートした理容室だつたが、開幕が近付くと二〇人に増員された。はじめの頃の客は警備、準備のための自衛隊員であつた。澄枝は中野の実家ではやつたことのないスポーツ刈りに挑戦、腕をあげていった。やがて各国から選手と役員がぞくぞくと入村し、外国人選手の理容室利用者も増えていった。椅子の空いた順番に案内すると「女性に刈られるのはいやだ」と拒否する客が出てきた。海外では女性の理容師などいなかったのだ。しかしガラス越しに見える理容室での澄枝の手際の良い仕事振りをみて外国人から

「彼女にやつてもらいたい」と指名されるようになった。

彼女を含め、「日本の理容技術の高さを海外にPRしよう」と「けがをさせない、嫌われない、怒鳴られない、親切にする」をモットーに選手村理容室は、技術の高さとともにアットホームな雰囲気でも外国人にも好評だつた。特に女性理容師は珍しく「週に二万五〇〇〇円だすからニュージラードにこないか」とスカウトされるほどであつた。

料理人、理容師のみならず、選手村の警備を担当した民間警備会社社員、シンボルマークやポスターを引き受けたグラフィックデザイナー、一〇〇分の一秒を争う男子陸上二〇〇メートルスタートのピストルを打つたスターター、記録映画「東京オリンピック」を撮影した監督とスタッフなど、裏方の陰での努力は欠かせない。

二〇二〇年の東京オリンピックではどのような裏方さんが活躍するのだろうか。

運動会今昔



高橋和島

(作家・郷土史家)

五月下旬、ずっと欠席続きだった町の小学校の運動会を観に行った。スー
プの冷めぬ距離に住む孫娘に声援を送
るためである。

五月の運動会は初めてだった。家人
に最近はこの時期に開かれるのかと
訊くと、わが町だけでなく全国的な傾
向らしいと言う。

運動会は俳句の秋の季語のはずだ。
念のため歳時記(角川書店編・俳句歳

時記)を開いてみたら、思い違いでは
なく、以下のような名句も添えられて
いた。

運動会庭の平を天に向け

山口 誓子

運動会少女の腿の百聖し

秋元不死男

わたしの育った山村では、稲田の刈
り入れを終えて、農繁期から解放され
た村人たちが、盆正月ほどでないに

ても、それなりの余所行きよそぎの衣服で着
飾り、莫塵もくじんや昼食のご馳走を詰めた重
箱の風呂敷ふろしき包みを抱え、稲架いねがの立ち並
ぶ田圃の中を抜ける農道を三々五々、
小学校に集まってきたものだ。

学校の運動会は娯楽の少ない時代、
村人がみな楽しみにする、秋の一大行
事だったと言っている。

しかし、わたしがいま暮らす田舎町
はあちこちに田畑は見られるものの、
農業で生計を立てる家は皆無に等し
い。旧慣にこだわるとしたら体育の日
が秋の祝日であることくらいで、稲の
刈り入れを考慮して運動会開催時期を
決める必要はない。

五月は日本が一番美しくなる新緑、
薫風の季節である。暑い夏がずれこむ
秋よりずっとさわやかな感じがし、こ
の時期の開催も悪くはないと思つた。
出かけてみると、変わったのは開催
時期だけではなかった。

むかしは町村のブロック(部落)ご
とに決められた場所に莫塵を敷き、そ
こからグラウンドの児童たちに声援を

送ったものだが、いまの父兄はお仕着せの場所を敬遠したがるということだろうか。持参した自前の日除け雨除けテントをそれぞれが設営し、そこを参観席にする人が目立った。

孫が通う小学校のグラウンドは都会のそれに比べて広く、しかも少子化によつて減る一方の生徒数に同じ父兄数も少ない。それでもグラウンドに面した場所に父兄全員の自前テントを収容するだけのスペースはない。だから、テントは校舎の裏手を含め、校内各所に張られている。あんな場所では肝心の運動会が観れないではないかと余計な心配したが、家人によると、最近の父兄は他所の子供の競技なぞ最初から観る気がなく、自分の子供の出るところしか運動会を覗かないのだそうだ。

考えてみると、わたし自身も似たようなもの。プログラムに記載された孫の出番時間以外は、ろくにグラウンドに目を向けなかったから、どこにテントを設営しようと不都合はないわけだ。

トイレに立つたついでに校内を一回

りして、こうしたテントに入る父兄たちが何をして時間を費やしているか観察してみた。

莫座に座っている人は見られなかった。みな折り畳み式の椅子と飲食用テーブルを持ち込み、そこに座っていた。

運動会の歓声やざわめきを耳にしながら、家族とおしゃべりや飲食を楽しむ人（クーラーボックスやコーヒポットなどは当然持ち込まれていた）、ひとりスマートフォンやタブレットをいじる人、イヤフォンで音楽を聴く人、居眠りをしている人……、さらには新聞や文庫本を読んでいる人もいた。

こうした光景は、私の家の近くにある運動公園で少年サッカー大会が催される際も見かける。

応援の父兄たちがやはり、テント、折り畳み式の椅子とテーブルなどを持ち込み、冬場には炭火を熾す用意までしてくる。つまりアウトドア用道具一式を揃えての応援態勢をとるわけだ。

豊かな時代になったものだと感心するが、懐に余裕のない父兄もいるはず。そうした人はきつとおつきあいに苦勞しているに違いないと、余計な心配をしてしまう。

孫の運動会に話を戻すと、頭にのせている帽子も着ている運動着もみな同じなので、他所の子と孫との見分けがつかない。困っていると、孫の母親が教えてくれた。靴とソックスの色、形。そして帽子からはみ出ている髪の色（孫娘はおさげ髪を結っていた）で見分けるのだと。

いまの子供は嘩然とするような値段の靴やソックスを履いている。多分、倅の嫁は自分の子を見分けるのに不自由しないよう、それなりの代価を支払っているに違いないと思った。

「じいちゃん坊主頭に鉢巻をしめ、裸足で走ったもんだよ。」

なんて話を孫娘にしてみても怪訝な顔をされるだけだろうから、聞かせるつもりはない。

八重の歌 その二

安 森 敏 隆

(同志社女子大学教授
ポトナム短歌会代表)



れていたのです。

『万葉』についての考説を試みることは、私の素顔の一つである(『初期万葉』あとがき)と語り、「詩経」や中国文学を主にやってきたが「素顔を忘れていたわけ」ではないことをくりかえし述べている。十五年たった平成六年『後期万葉』(中公文庫)も一挙に書かれて白川万葉論は、一応の完成を見る。その間に、白川静の字書三部作『字統』(平凡社・昭和五九年)『字訓』(同・昭和六十二年)『字通』(同・平成八年)が構想され、先ずは書かれたのである。平成十五年、九十三歳になった白川静は「ポトナム全国大会・京都」で「短歌の原質」と題して、「歌」について熱弁をふるわれたのが今も生々しく思い出されます。

歌の本質からもうしますと、歌というものは神に訴えるものであり、それが歌の起源であるわけです。ところが、人間が神と交渉をもち、神に対してお願いをするというようなこと

「ポトナム」の名譽顧問で、中国文学者で文字学者の白川静は「歌」の語義について先ずは、口を大きく開けて、その「口」にあたる「サイ」という器に祝詞に当たる最も美しく良き言葉を入れて神に向かつて力強く「拍つ」ごとく「訴え」ると言っています。

白川静にとって「万葉集」の研究、殊にその『初期万葉』(中公文庫)の研究は「詩経」の研究の前から構想され、小泉琴三に出会う昭和九年以前において、大伴家持論に共感し、アララギ派の素朴实在論による自然の捉え方とはまったく違う初期万葉論を構想さ

は、どのような時であるかと言いますと、これは人生の非常に重大な時期、あるいは国として重大な事柄、共同体の生活として重要な事柄、そういうことにたいして神様にお願いをするわけです。そういう場合、神様にお願いをする時には、こうして強要するということはない方もありますが、あるいは神様を褒めるといふことも一つの方法なんです。人に言うことを聞いていただく時には、叱るばかりではなしに、ちよつと褒めることも必要なわけです。これが祝歌、お祝いの歌であります。(中略)それから人生の最も悲しいことは「死」です。死を悼む、死者を送る、これがいわゆる挽歌になるわけです。そういうふうなものが、大体一番最初に生まれてくる歌であるというふうには、私は思います。景色を眺めたり、あるいは人間関係を歌うというふうなことは、よほど高度の社会生活になってからのことでありまして、古い時代の人の生活は神々ともにあった、良くも悪しくも、とにかく

神々ともにあるという、そういう生活であつたわけであります。だから国褒めの歌を歌う。あるいはお酒をつくる時でも、祝ぎ歌をつくつて、良いお酒ができますというふうには褒めそやした歌を歌いながらつくるといふふうにして「祝う」わけです。

〔短歌の原質〕(ポトナム)

平成十六年四月号掲載

ここで「歌」の根源的語義について呪能をもつ漢字として甲骨文字にまでさかのぼつて、挽歌や祝ぎ歌に原質を見て解明した白川静は、実は若くして、歌を好み、歌人の一人でもあつたのです。小泉菱三のもとで学生時代に短歌をはじめ、「ポトナム」や「くさぶぢ」に短歌を発表し、中国文字学の独自の分野を確立し、晩年は再び「ポトナム」の名譽顧問として歌も作つておられた。

八重の歌に話を戻すと、その「歌」の伝統を継承して次のような、「和歌」をうたっています。

たちならぶ松原ごしに見ゆるかな

月照り渡る須磨の浦波

大磯の浪に砕くる月影は

いかに淋しき姿なるらん

いくとせか峰にかかれるむらくもの

はれてうれしき光をぞ見る

和歌の歌ことばと歌枕の中心部をなすもののひとつに「月」「月影」「光」がある。八重の場合これらの歌ことばがともよく使われている。須磨の浦波や松原や大磯をうたいながら「月影」(月)がみごとに背景にあつて、松原や須磨を照らしている。実際に須磨に行つた時の歌(「須磨にものしけるとき」の詞書)として従来は解釈されているが、実際の須磨で見た風景か、どうかすら判らない歌の一つである。それは和歌の無名性と無私(消私)性による伝統をしつかりと受け継いでうたわれた和歌的美意識の「歌」であるからです。

ほろ酔い詩歌紀行 —— 草野心平

日 高 昭 二

(神奈川大学教授)

詩人草野心平は、戦後の新宿で酒場「火の車」を経営し、みずから板前の仕事もしていた。その様子は、詩集『マンモスの牙』（昭和四十一年六月）収録の詩「地図」の冒頭などによくうかがうことができる。

夜の街が深く音なく沈む頃だ。
毎晩。

「火の車」の赤い提灯をおろすのは。
泥酒の匂いを吐きながらそしてね
るのは。

閉店時、すでに店主は「泥酒」の相を、つまり、泥んこのように酔いつぶれている。まるで夜と昼をつなぎあわせたようなみずからの生活について、詩「地図」はまたこうも言う。

なんと雑雑の夜と昼と夜と昼と。

夜は時たま

ガキガキの喧嘩無頼になり。

なつては夜叉のかなしみのまんま

もぐりこむ。

提灯をおろして。

何処へ。

やつぱり布団のなかに。

心平が居酒屋「火の車」を開いたのは、昭和二十七年のことで、東京文京区小石川の初音町である。板前を兼ねて店に出ていて、飲み過ぎ歌い過ぎで

声が出なくなり、蓼科高原で静養しているうちに店がつぶれる。やがて新宿のバラックセンターでふたたび「火の車」をはじめたが、センターの取り壊しで閉店。しばらく休業のち、今度は新宿御苑近くにバー「学校」をはじめめる。一九六〇年六月十五日、新安保条約強行採決反対のデモがあった日で、心平自身もその行進に加わるなかで開店の案内状を顔見知り配ったという。

もつとも、心平が酒の店を開いたのは、この「火の車」が初めてではない。最初は、「いわき」という屋号の焼鳥屋で、ポロ同然の屋台をガラガラ引いて、東京の麻布十番ではじめた。

赤坂溜池の焼鳥屋に弟子入りしてのことだというが、心平はその店の師匠の自転車を借りて詩集を売りにでかけてもいる。やがてこの屋台の店は、新宿の紀伊国屋書店の裏のほうへ移ったが、そこには高村光太郎・智恵子夫妻がよく訪れたという。

心平は、ただ酒を飲むばかりではなく、自分で調理するのも好きだった。彼の書く随筆には、野草や花々や魚などのちよつと変わった料理の数々が並んでいていずれも味わい深いが、なかでも得意としたのは鳥などの臓物料理で、そうした彼の感覚が、当然詩の一節に顔を出してもいる。画家ゴッホの有名な絵「鴉の群れる麦畑」に寄せて作られた詩などがそれだ。

カンパスに。

麦の穂波はあふれ。

あふれ迫る。

岩塩のからさで割れるもの。

(馬肉色の径は曲り。)

サワサワザワ低く

すれすれ鴉の群が近づいてくる。

心平が得意とした「臓物」料理の感覚がはつきりと見えている。そのことで思い出すのは、昭和三年、群馬県の前橋に住みついた心平が、家の鴨居に「鳥の骨」をぶらさげていたというエピソードである。彼は、訪れた客たちに湯をわかし、そこに骨を入れ、やがて骨を引きあげて鴨居に結び付け「この骨はダシ用で、こうしておけば何度でも使える」と語る。むろん、客たちは啞然として返す言葉もない。そればかりではない、心平は、近所の草をかたっぱしから摘んでまわっては、天麩羅に揚げていたともいう(朝日新聞前橋支局編『上州文学紀行』)。

つまり、骨の髄まで「貧乏」だったというわけだが、同時に生きることの凄まじさも伝わってくる。前橋時代の同人雑誌「学校」に発表した詩の一節に、「風邪には風、痔にはブラン、胃には沢庵」の言葉がある。風邪は赤城おろしの風に対峙し、痔は酒を飲んで

直したというのである。しかもその酒は、必ず冷や酒に限ったという。

そういう心平が、ヨーロッパを独り歩きしているとき、スイスの酒場で日本の清酒の一合入りをみつける。そのとき彼は、半世紀も飲みつづけてきたのに、ニッポンの酒について、まともに讃じたことがないことに気づく。そこで生まれたのが「日本の酒」という詩である。

おきなエヒ型の北の島から。

開聞岳の見える海辺の村まで。

ニッポン全土に。

ニッポンの酒はゆきわたる。

舌の上からまるまつておちる。

琥珀色の液体の。

もやのやうな芳香と芳醇と。

よき哉。

讀ふべき哉。

古事記の人人。

その独自の発明の知恵。

その陶然と浩然と歌と踊りを。

現代の。そして未来の友よ。

賞めたたへよ。

美しいニッポンの。

ニッポンの酒を。

心平は、晩年、故郷である福島川内村の名誉村民として「天山文庫」を落成する。その書庫は、もと酒樽で、一部に矩形の入り口を開け、内部に書棚をぐるりとめぐらす。その樽の三つを合わせた容量を数えると「六拾二石九斗六升七合」。果たしてそれだけの酒を生涯に飲んだか、どうかと、心平はひとり考えていた。もちろん、酒樽の書庫のなかで。



鉄砲百合

中西美子



清楚な、白百合は、祭壇にも仏壇にも良く似合うというか良く飾られています。お墓参りにもかかせない、神事に、使われる花の一つのように思うのはなぜでしょう。

仏花に薔薇は、使えないためか、菊だけより華やかになるからか、季節の問題か、キリスト教では、まさに白百合が聖母マリアの花だからなのかなど、どうでもよい事を考えてしまいます。

西洋では、マドンナリリーというのがあるそうです。

絵画では、ダヴィンチや、ボッティチェリの受胎告知で、聖母マリアのアトリビュートとして、天使ガブリエルが鉄砲百合を持っています。お決まりの青いモーブをまとった乙女マリアにイエスを身ごもったことを告げるわけです。おしべのない白百合は、純潔を意味します。絵画において物に意味がある事を知った最初の物が受胎告知の鉄砲百合だったので、鉄砲百合を見るたびに思います。絵画を読み解くのは、結構楽しいものです。特に宗教画や神話を題材にしたものは、知らないとなんだかさっぱりわからない事も多いので、少しは、知っての方がいいですね。

シエパードが前立腺ガンを診断



杉本 忠 夫

(虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医)

最近、臨床診断・診療技術が格段に進歩し、その精度も飛躍的に高まって参りました。しかしながら、気の進まない検査を受けることは、残念ながら心身ともに検査の負担が大きいのが現状です。

たとえば、上部消化管内視鏡(胃カメラ)では、内視鏡がのどを通過するときにゲーエー、ゲーエーとなり、不愉快なことです。

また、下部消化管内視鏡検査(大腸

カメラ)では、まず検査前に二リットルもの多量の下剤を飲まなければなりません。そして、大腸カメラが腸にはいり検査が始まると、お腹をかき回されるようで苦しいことです。そのため二度と大腸カメラ検査を受けたくないとおっしゃる方がおられます。どうしても必要な場合、やむなく注射などで前処置をしてから検査を行なわざるをえないことがあります。

採血検査についてみてみますと、採

血を受ける時に不愉快な採血針の刺痛を伴いません。永年採血に通つておられる方は採決に手慣れた採血士を指定されることもあります。また、採血時に自分の大腿をつねって、刺痛を相対的に和らげている方もおられます。採血を受ける方も工夫しておられるようです。

ところで、スマホがこのように普及した時代です。もつと負担の少ない検査法がないのでしょうか。

そのような検査の一つに、負担が少ない血液中の酸素濃度を測定できる器具(装置)が開発されております。この器具はすでに臨床で頻用されております。

それは、現在の臨床診療には欠かせない血液中の酸素濃度を測定する酸素(O₂)モニター(パルスオキシメーター)です。

この器具は体外から血液中の酸素濃度を測定することができます。一本の指を器具のセンサー部分に挟み込むだけで血液中の酸素濃度と脈拍が瞬時に

測定できます。

酸素 (O_2) モニターが開発され臨床応用される以前、注射針を動脈に刺入して動脈血を採取し、そして血液の入った注射器ごと、駆け足で酸素濃度測定器室まで運んで測定していました。

以前の注射針は現在ほど鋭利ではなかったこともあり、動脈に針を刺すと血管痛が生じ、検査を受ける方の苦痛が多かったものでした。また、緊急時に測定する場合には病状に応じて頻回に測定するため苦痛は大変なものでした。

日本では動脈採血は医師に限られており、やや技術を必要としたので、多忙な医師にとって動脈採血は負担となっておりました。

現在、この酸素 (O_2) モニターは救急室、手術室、ICU、病棟で大いに利用されております。

また、慢性呼吸不全で携帯酸素療法を受けておられる方では、酸素濃度を測定し酸素吸入療法の酸素量の調節などに大変役立つております。

ところで、この苦痛の多い検査法に関連して、非常に興味深い研究がイタリアで行なわれております。

それは、犬 (シェパード) の嗅覚で前立腺ガンを診断したという研究報告です。

よく知られていますようにシェパードは警察の警察犬、麻薬取り締まりの麻薬探索犬、軍用の爆発物探索犬などと目を見張る活躍をしております。

また、災害時に瓦礫の下などの生存者の探索に災害犬が活躍していたのをテレビ報道で見られた方が多いと思います。

最近、イタリアのヒューマンリサーチ研究所泌尿器科前立腺疾患部門主任ギアンルイギ・タバエルナ先生達が、シェパード二頭に前立腺ガンの探索犬になるように訓練を行いました。そして、この二頭のシェパードに前立腺ガンと診断された方の尿と前立腺ガンでない方の尿の臭いをかき分けさせ、前立腺ガンとそうでない方を診断ができるかどうかを検討されました。

その結果、約九〇〇件の尿の検体についてシェパードに臭いで診断させたところ、ほぼ一〇〇%に近い確率で前立腺ガンの尿を的中させたそうです。信じられないような素晴らしい成績でした。

この研究では、検査を受けた方は尿の提出だけで前立腺ガンの診断がなされたことになり、画期的なことだと考えられます。

このような研究が行なわれ、その機序が解明されると、新しい負担の少ない、人に優しい検査法が開発されていくと思われれます。

今後、新しい検査法が次々開発され、検査を受ける方の負担を減らせることを期待しましょう。

有名なアインシュタイン博士が在籍していたドイツのマックス・プランク研究所では、血液中の酸素 (O_2) モニターに应用された物理化学の基礎研究等が多角的になされております。今後、これらの研究成果の臨床応用を待つばかりになっております。